

論 文 要 旨

鹿児島大学

Instrumental Activities of Daily Living: The Processes Involved in and Performance of These Activities by Japanese Community-Dwelling older Adults with Subjective Memory Complaints

手段的日常生活行為：日本における主観的もの忘れを自覚する地域在住高齢者の各生活行為と工程

博士後期課程 臨床精神神経障害学分野
池田由里子

【緒言】

主観的もの忘れ（subjective memory complaints；SMC）は記憶低下を自覚することであり，認知症発症の予測因子の1つと考えられている．SMCを訴える時点からのリハビリテーション介入が認知機能低下予防に効果的となる可能性がある．また，SMCとIADLの関連性を示唆した報告もあり，SMCの段階から複雑なIADLの自立度が低下する可能性がある．しかし，SMCのある地域在住高齢者と生活行為の関連性を詳細に調査した報告はみられない．今回，生活行為工程分析表(Process Analysis of Daily Activity for Dementia；PADA-D)を用いてSMCの有無と生活行為の特徴を明らかにし，高齢者が地域生活を継続するために効果的な生活支援を検討することを目的に調査を実施した．

【対象】

無作為に選択したコープかごしまの60歳以上の組合員2,000人に自記式質問紙を送付し，621名の回答があった（回収率31%）．回答者621名のうち，もの忘れの自覚の有無について回答し，調査内容に不備のなかった270名を本研究における分析対象とした．

【方法】

1. 研究デザイン：自記式質問紙による横断研究
2. 調査期間：2018年12月15日～2019年1月15日
3. 実施方法

（1）調査手順

対象者はEveryday Memory Checklist（EMC）に答えたのち，SMCの有無について回答した．さらに基本情報，PADA-DのIADL8行為について回答した．PADA-Dは認知機能の低下に伴う各生活行為の障害を工程レベルで分析可能なADL評価表である．1つの生活行為につき5工程に分けられ，さらに1つの工程につき3つの下位項目で構成される．なお，対象はSMC(+)群（137名）とSMC(-)群（133名）に分類した．

（2）統計解析

基本情報は対応のないt検定またはカイ2乗検定により関連を分析した．PADA-Dの合計得点，IADL8行為は対応のないt検定にて2群間の差を比較した．さらに，PADA-D5工程について2群を自立と非自立に分類した後，カイ2乗検定にてSMCとIADLの関連性を詳細に分析

した。統計解析は SPSS Statistics ver25.0 を使用し、有意水準は 5%ならびに 1%とした。

(3) 倫理的配慮

本研究は鹿児島大学医学部疫学研究等倫理委員会の承認を得た（2018 年 12 月 27 日承認，170377（370）疫-改2）。

【結果】

EMC 合計得点は SMC（+）群（ 12.1 ± 7.2 点）が SMC（-）群（ 6.3 ± 4.6 ）に比し有意に低値であった（ $p < 0.001$ ）。PADA-D の IADL8 行為について、SMC（+）群は、SMC（-）群に比し、電話（ $14.4 \pm 2.4, p = 0.013$ ）、買い物（ $14.1 \pm 3.0, p = 0.019$ ）、調理（ $13.9 \pm 3.2, p = 0.013$ ）、家事（ $13.5 \pm 3.3, p = 0.006$ ）、金銭管理（ $12.4 \pm 3.4, p = 0.035$ ）、服薬管理（ $13.9 \pm 2.9, p = 0.028$ ）において有意に低値であった。PADA-D の IADL5 工程について、SMC（+）群は SMC（-）群に比し、40 工程中 27 工程（献立を立てる、生活用品の管理、残薬確認など）で自立している者が有意に少なかった。

【考察】

SMC を訴える高齢者は電話、買い物、調理、家事、金銭管理、服薬管理の低下が明らかとなり、先行研究を支持する結果であった。これらは遂行機能、working memory、情報処理能力や判断力など高度な認知機能を必要とする複雑な生活行為であり、加齢との関連性も報告されている。他方、生活行為を細分化して工程別に自立との関連性を検討した結果、SMC のある高齢者は日常生活の様々な場面で道具の使用・操作、物品管理、道具の選択・モニタリングに困難さが生じていることが明らかとなった。IADL の上記のような困難さの背景には短期記憶、見当識、展望記憶、遂行機能、分配性注意が関連していることが考えられた。

【結論】

SMC のある高齢者は、複雑な IADL 行為が障害されることが確認され、道具の使用や操作、物品管理、道具の選択・モニタリングが必要とされる工程に困難さを有していることが示唆された。SMC のある高齢者が地域生活を継続するためには、生活行為を詳細（工程レベル）に観察し、低下する工程を予測し、残存する工程を活かした具体的な生活行為への支援が必要と考えられた。

International Journal of Environmental Research and Public Health 2019,16,2617;

doi:10.3390/ijerph16142617掲載

IF;2.468